


 書評

日本精神神経学会百年史編集委員会 編集

『日本精神神経学会百年史』

精神医学史にとって貴重な基礎資料の集成

加賀乙彦

日本精神神経学会が創立百周年を迎えたのを記念して『日本精神神経学会百年史』が刊行された。869 ページの本篇と 357 ページの資料篇で、こちらには「神経学雑誌」と「精神神経学雑誌」の総目次を収めた CD-ROM がついている。

とにかく分厚いどっしりとした本 2 冊で、学会の歴史の複雑でしかも濃密な時間を実感させる出版である。私が精神科医になったのは 1954 年で、ほぼ 50 年経っていて、この歴史の半分を生きてきたのかという個人的感慨とともに本を開いてみて、いろいろな感想が沸き起こってきた。

百年の間に、ある時代に関心のある病気と治療法が変わっていったのが、学会の演目を眺めていて実感される。1935 年に開発されたインシュリン療法が、総会の演題に出てきたのが 1937 年であったとか、1952 年に開発されたクロールプロマジンの演題は 1956 年の総会に出てきたと知ると、日本精神神経学会は最初の 50 年ぐらいは、世界最先端の研究や治療法を数年遅れで追っていたようだ。それが、最近二、三十年は、世界をリードするような研究がどしどし出てきていて、隔世の感がある。

学会としての大事件は、1969 年の金沢学会での騒動であるらしく、それへの言及が多く目についた。「学会の 100 年そしてこれから」という座談会が当時の状況を当事者の立場からあれこれ語っていておもしろい。

七十年安保前夜の学園紛争やその後の学会内の対立も、今や過去の出来事になってしまった

が、一体あの大騒ぎで何がどう変化して、何が得られたのかを知りたくて、この分厚い本を、あちこちめくってみたが、はっきりしなかった。

依然として不可解な病気は統合失調症で、百年記念の伊藤正男の「精神医学における脳科学の役割」という講演でも、研究は難航していて「一つはっきりしてきたのは、遺伝子の何らかの異常が背景になっていることである」というのでは、まだはっきりしていないようだ。

百年間に、多くの研究者が卓抜な研究を重ねてきたこと、精神障害者の人権保護のために貢献してきた事実は、はっきりしている。学園紛争なども、そのための対立であったと思うのだが、その点の解明はこれからの仕事であろう。

とまれ、この『百年史』には、これまで学会内部で起こった出来事、研究、人事、対立抗争、改革が、幅広く、また丹念に集成されていて、日本の精神医学史の、基礎資料になりうることはたしかである。この大冊を足がかりにして未来の学会の発展が行われるのだと私は思う。私が存じ上げていて個人的にお付き合いした先生方の名前も数多く出てきて、そういう懐かしさもあって、私はこの『百年史』をこれからもひもとくことであろう。

(作家・精神科医)

● B5判 本篇と資料篇の 2 分冊(学会誌掲載論文総目次・精選 49 論文掲載 CD-ROM 付き) 本篇 892 頁 資料篇 368 頁 計 1,260 頁 頒価 15,000 円(送料・税込み) 日本精神神経学会刊